

爾曹を離れ天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く來らん(徒一〇)。
其日其足は橄欖山に立たん(亞十四)。

此等の日の患難の後直に彼等人の子の權威と大なる榮光を以て天の雲に乗來るを見ん(太廿四〇廿九、卅、可十三〇二十六路廿一

〇二)

人の子大權の右に坐し天の雲の中に顯はれ來るを爾曹見るべし(可十四〇六十二、太廿六〇六十四)。

觀よ彼は雲に乘りて來る衆の目彼を見ん(黙一〇)。

彼等その刺したりし我を仰見ん(亞十二)。

主イエス其能力の諸使と天より顯はれん(撒後一〇七、太廿五〇卅一)。

我また天の闊くを見しに一匹の白馬あり之に乗る者忠信又誠實と稱せらる(黙十九、〇十一)。

觀よ主其處を出て地に住むもの、不義をたゞし玉ばんこす(賽廿六〇廿一、米一〇三、

廣耶者シオンに來リヤコブの中の裔をばなる者につかん(賽五十九、〇二十)。

シオンの女よ歌ふて樂め觀よ我來りて爾の中に居らん主曰ひ給へり(亞二〇)。

主は教會と偕に來臨する事

天にある諸軍、鋭く輝ける細布を着白馬に乘りて之に従へり(黙十九〇)。

彼と偕にありし者は皆召れ撰れたる忠信の者なり(黙十七〇)。

我主なる神將に至らん且諸聖徒も彼と偕に至らん(亞十四、〇五)。

觀よ主其聖軍と偕に來る(猶十)。

我等の主イエスその諸の聖徒と偕に臨らん(撒前三、〇十三)。

我等の命なる基督の顯はれん時我等も之と偕に榮の中に顯はるべしなり(四三〇)。

彼顯はれん時我儕は必ず神に尙ん(約壹三)。

神の諸子の顯はれん(羅八〇)。

偽基督の權威は主の聲に依て破壞滅亡せらる(一)偽基督と偽預言者は捕はれて硫黄と火の池に投せらる(二)千人の同盟の王と其諸軍は諸王の王の口より出る所の劔を以て殺さる(三)惡魔は底なき坑の中に千年間縛置るか(四)此時の間偽基督の下に殉教者となりし者は第一復生の完了せるため甦らされ主耶蘇及び其聖徒と偕に地上に王たらん(五)

右の引服左の如し

耶蘇の再臨

(一) 賽十一〇四、但七〇 (二) 賽三十〇三十一、三十三 (三) 詩二〇四、五、同百十〇五 (四) 二 歌廿〇 (五) 二 (六) 撒後二〇八 (七) 歌十七七〇八、同十九〇廿 (八) 亞十二〇九、歌十七七〇十四 (九) 二 歌廿三 (五) 四一六

生命を得る爲に復生する事

又耶穌の證及び神の道の爲めに首斬れたる者の靈魂を見たり、此は歌に其像を拜せし其印跡を額或は手に受けざりし者の靈魂なり皆生て基督と偕に千年の間王となれり (歌廿〇)。

善事をなせし者は生を得るに懸る (約五〇)。

目を醒し其中永生を得る者あらん (但十二〇)。

是第一の復生なり (歌二十)。

主全地に王となる事

この諸王の日に天の神一の國を建給はん是は何時までも滅る事無らん (但二〇)。

視よダビデに一の義き杖を起す日來らん彼王となりて世を治め榮へ公道と公義を世に行ふべし (耶廿三)。

又主なる神其先祖ダビデ王の位を彼に予へん (路一〇三十二)。

我王を我が聖きシオンの山に立てたり (詩二〇)。

萬軍の主シオンの山とエルサレムに王となり且其諸長老の前に榮あらん (賽二十四〇二十)。

イスラエルの王は爾の中に在り (番三〇)。

かれ諸の敵を其足の下に置く時迄は王たらざるを得ざればなり (番前十五)。

列王皆其前に俯服し萬民皆之服事せん (詩七十二)。

此世の諸の國は我等の主及キリストの屬なる (歌十一〇)。

彼海より海に至り大河より地の極に至るまで宰治せん (詩七十二〇八)。

且主全地の王となり其日には獨り主と其名あるのみ (亞九十四)。

主は其新婦即ち教會と偕に王たる事

諸王の王諸主の主 (歌十九〇)。

我儕彼と偕に王たらん (提後二)。

神の後嗣即ちキリストと偕に後嗣となり偕に榮を受けん (羅八〇)。

勝を得る者には我と偕に我寶位に坐する事を許さん (歌三〇)。

爾は我儕の神の爲めに我儕を王となし祭司となしたれば我等地に王たるべし (歌五〇)。

天城即ち新婦の家庭の事

七人の天使の一人來りて我に語りて曰けるは、來れ我爾に羔の妻なる新婦を見せんと、彼又我に大なる城聖
キエルサレム神の所を出て天より下るを示せり(黙廿一〇)。

我神の京城即ち天より我が神の所より降る新しきエルサレム(黙三〇)。

其高大と美麗の事

此に大なる高き石垣ありて十二門あり、其門に十二の天使居れり、門の上に名を録せり、メヌラエルの十二
の支流の名なり(黙廿二)。

城の石垣に十二の基趾あり其上に羔の十二使徒の名あり(黙廿一)。

石垣は金剛石にて築き城は清潔なる玻璃の如き純金にて造れり(黙廿二)。

城の石垣の基趾は各様の玉にて飾れり(黙廿一)。(〇十九) 十二の門は十二の眞珠なり一の眞珠にて一の門を造り城の

階は澄徹る玻璃の如き純金なり(黙廿一)。

其榮光と清純の事

われ城の中に殿あるを見ず、蓋は主たる全能の神及羔其殿なればなり、又城に日月の照す事を需めず蓋は神

の榮光之を照し且羔城の燈なればなり(黙廿一〇廿)。

其城の光輝くと至寶き玉の如く澄徹る金剛石の如し(黙廿一)。

萬の國の民此光に纏て歩まん、地の諸王已の榮と尊貴を以て此城に來らん、其門は終日閉とす此に夜ある
となし、萬の民已の榮と尊貴を以て此城に來らん(黙廿一〇)。

凡て渾らざる者及憎むべき行を爲すもの或は誰を言ふ者は必ず此に入るとを得ず、唯羔の生命の書に録され
たる者のみ入るなり(黙廿一)。

千年の終に於てサタンは暫く其囚獄より放たれ(一)地上の四方の民とゴブとマゴブの民を欺き戰を爲さ
んさて人々を集め(二)彼等諸聖徒の陳營と夫の愛する一城を圍む(三)而して神天より火を降して彼等を亡
す(四)而して彼等を誘ひし惡魔は硫黄の火の池に投せらる彼の獸と偽預言者も亦此にあり、皆永遠限なく
夜も晝も苦痛せん。

(一) 黙廿〇 (二) 賽四 (三) 黙廿一 (四) 黙廿一

全地の審判者

われ白き大なる寶座にこれに坐する者を見し(黙廿〇)。

生けるもの死ぬる者を審判するイエス、キリスト(提後四〇一)。
 生ける者死者の審判人に神より定められし者(徒十〇四十二、
 彼前四〇五)。
 審判は凡て手に委たり(約五〇)。
 刑罰の爲めに復生する事

我又死し者の大さ小さの別なく皆神の前に立を見たり(黙廿〇)。
 海其中の死人を出し死に陰府に其中の死人を出せり(黙廿〇)。
 悪しきことをなせしものは罪を得るに甦るべし(約五〇)。
 目を醒され耻辱を蒙りて限なく甦るものあるべし(但十二)。

最後の審判の事

其處に書ありて展く別に又一つの書ありて展く是生命の書なり、死し者は皆書に録せる所の事に由り其行に従ひて審判を受くるなり(黙廿〇)。
 永遠の刑罰の事
 凡て生命の書に録されざる者も亦火の池に投げ入れられたり(黙廿〇)。

火と硫黄の燃ゆる池にて其報を受くべし是第二の死なり(黙廿一)。
 滅へざる火又彼處に入る者の蟲盡きず火きへず(可九〇四十八)。

最後の敵の事

最後に滅さる敵は死なり(哥前十五)。
 死に陰府に火の池に投入せられたり是第二の死なり(黙廿〇)。

天地廢滅の事

天地は廢せん(可十三〇)。
 天は大なる響あつて去り體質盡く焚毀れ地と其中にある物皆焚盡ん天熱毀れ體質焚け録ん(彼後三)。
 天は烟の如く散じ地は衣の如く破れん(賽五十)。
 此等は亡ん此等凡て衣の如く褻びん爾此等か袍の如く褻む又彼等は變らん(來一〇十)。
 地と天と其前を避れて再び止まるべき所を得ず(黙廿〇)。

新天新地の事

耶蘇の再臨

實座は坐するもの吾に曰けるは視よ吾萬物を新にせん(黙廿二)。
視よ吾新天新地を創造す(賽六十五)。

われ新しき天と新しき地を見たり先の天と先の地は既に過ぎ去り海も亦あることなし(黙廿二)。

新しき天新しき地を望みて待てり我其中にあり(彼後三)。

神は凡の物の上に主たる事

後彼諸の政及諸の權威を滅して國を父の神に付さん是終なり(哥前十五)。

萬物彼に服ふ時は予も亦自ら萬物を己に服はし者に服ふべし。是神すべての物の上に主たらん爲めなり

(哥前十五)。

羔の新婦の事

吾聖城なる新しきエルサレム備整ひ神の所を出でて天より降るを見る其狀は新婦其新郎を迎ん爲に修飾たる

が如し(黙廿二)。

神人と偕に住み給ふ事

吾大なる聲の天より出づるを聞けり云く、神の幕屋人の間にあり神、人と共に住み人、神の民となり神又人

と共に在して其神を爲り給ふなり神彼等の目の涕を悉く拭きり復死あらす哀み哭き痛あることなしそは前事
既に過去はなり(黙廿一〇)。

引照

便宜の爲め聖書中に記せる順序に従て、主の再臨に係る緊要なる諸章を左に列叙し、
又其諸章を區別せんが爲め其語を抜萃す。

シナイ山、シナル山變貌及び再臨

申卅三

子の産業等の事

詩二〇

萬民を審判し并に支配する事

詩六十七

主審判せん爲めに臨る事

詩九十六、九十七、九十八、九十九

シオンを建て榮光を以て顯る事

詩百二〇

人の子其國を領せんとて來る事

但七〇

彼前と後の雨の如く臨る事

何六〇

耶蘇の再臨

11011

イスラエル基督を見て受納るる事

彼橄欖の山に立つ事

諸聖徒と偕に臨る事

其父の榮光をもて來らん事

其榮光の寶座に坐する事

答へられたる三疑問の事

新郎の事

僕等の審判の事

萬民の審判の事

天の雲に乗りて來る事

人の子も其來る時知らずと言はるゝ人の事

答られたる三疑問の事

亞十二

〇十一

亞十四

〇四

亞十四

〇五

太十六

〇廿七

太十九

〇廿八

太廿四

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

太廿五

〇一

イスラエル基督を見て受納るる事

彼橄欖の山に立つ事

諸聖徒と偕に臨る事

其父の榮光をもて來らん事

其榮光の寶座に坐する事

答へられたる三疑問の事

新郎の事

僕等の審判の事

萬民の審判の事

天の雲に乗りて來る事

人の子も其來る時知らずと言はるゝ人の事

答られたる三疑問の事

可十三

〇一

路九

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

路十二

〇一

彼若し我來る迄存らへるとも云へる事

去りて復來らん事

吾爾曹に來らん事

約束即ち來りて爾曹を受けん事

天開け諸天使降る事

領地を受けて歸らんとて往くこと、十人の才能ある僕の時

答へられたる三疑問の事

地に信なき事

路十九

〇一

路十九

〇一

路十九

〇一

路十九

〇一

此イエス復來るべき事

安舒日の事

再臨を待つ事

主の來る迄は何をも審判せざる事

彼の來る迄の交の事

復生の順序と基督の來らん時彼に屬ける者の事

詛はるべし主臨らん事

主の日に於て欣喜ぶ事

基督の日迄の事

基督の日に於て欣ぶ事

死人の中より復生する事

國民たるの權と救主を求むる事

徳一〇十

徳三〇十九

四前一〇

四前四

四前十一

四前十五

四前十六

四後一〇

四後一〇

四後一〇

四後一〇

四後一〇

主は近ける事

彼と共に顯はるゝ事

天より其子の臨るを待つ事

主の臨らん時望と喜と畏の事

其來らん時咎なからん

擧げの事

時と期、夜と晝の事

其來らん時迄咎なき事

火焰の中に顯はるゝ事

悪者が彼の來臨の輝光に依て滅さるゝ事

其顯はれん時迄誠を守れ

顯はるゝ時其國に於て審判する事

四前四〇

四前三〇

四前二〇

四前一〇

四前二〇

四前三〇

四前四〇

四前五〇

四前六〇

四前七〇

四前八〇

四前九〇

四前一〇〇

彼の顯を慕ふ凡に覺備はる事
望む所の福と榮の顯の事

三の顯現の事

信仰と望と愛の事

近ける日の事

暫時の忍耐の事

忍びて主の來るを待つ事と前と後の雨の事

信仰の試の事

終りまで望むべき事

彼の榮光の顯はれん時の事

牧者の長の顯はれん時の事

誹謗者と主の日の事

提後四

〇八、

多二〇、十一

來九〇、廿四

來十〇、廿二

來十〇、卅五

來十〇、卅七

雅五〇、七、

八、

彼前一〇

〇七、

彼前四〇

十三、

彼前五〇

一、四、

〇、

彼後三

彼の顯はれん時我儕懼なしと云ふ事

今神の子たり、神に背ん、此望を懐く

肉體となりて來る事

主審判を行はんとて諸聖徒を率て來る事

視よ彼は雲に乗りて來る

我來る迄堅く守れと云ふ

若し目を醒し居らずば我盜賊の如く汝に至らん

試煉の時より免れしむ、われ迅速に來らん

地は刈收られたりと云ふ事

視よ我盜賊の如くして來らん、目を醒し居る者は福なり

主耶蘇よ來り給へ

約壹二〇

廿八

約壹三〇

二、三、

約貳〇

七、

猶十四、

十五、

七、

〇、

〇、

本論に關係する甚だ重要な意を含有する章句頗る多しと雖、特に左の二句を最も重要

のものとする。其一は、パウロの挨拶の中にありて(哥前十六)彼は茲に祝福を述ぶるに先
ち左の語を以て耶蘇を愛せざるものを排斥せり。

「もし人主イエス、キリストを愛せざれば

誑はるべし主臨らん」

夫神の忍て待ち給へる時(彼後三〇九)吾人主イエスを侮り棄つるは甚だ易し。然れども
イエス將に來らんとす、されば「家の主人起ちて門を閉しとき」(路十三廿五、可十)、尙
彼を侮り棄つる人は禍なる哉。パウロ既にこれを知れり、故に曰く「衆の人には我そ
の衆人の狀に循へり是如何にもして彼等數人を救はん爲なり」(哥前九)又曰く「我儕を來
らんとする怒より救ふ者なり」(撒前一)と「獲るべき時にエホバを求めよ」(賽五十五〇六、一
「來らんとする怒を避けよ」(太三〇七)他の一句は即ち約貳書七節にあり曰く「惑に誘ふ
者多く世に出でイエス、キリストの肉體となりて來り給へること(當に臨り給はんこ
と」を譯すべし)を認はさず、此惑に誘ふ者はキリストに敵するものなり。又キリ

ストは特更に「來る所の者」(太十一〇三、來十〇廿七、歐一〇)と稱せらる。然れ共彼の欺く
者はキリストの肉體となれる事或は肉體をもて來り給ふ(過去も)事を拒む(アルフホルド、ジ
ン諸氏の著書を見よ)、これ亦格別の注意を要すべき事なり。

耶蘇の肉體となりて來る事

を拒む者は欺く者なり、偽基督なり。即ちかゝるものは終には人格を具ふる一大偽基
督となりて顯はれんとする靈を有する者なり。

此節を譯するに當り、斯く不適當に翻譯せられたるは實に悲しむべき事なり、若し譯
して當を得ば耶蘇が肉體となりて來り給ふと言へる事を以て、今日廣く流行する如く
不適當に「義譯すること」を防ぐに足るべかりしなり。耶蘇は我儕を彼に受けんとて
(約十四)「携擧の時自ら來臨し」(撒前四)「彼復び顯現の時」(撒後二〇)「其狀貌も來況も共に
其昇天の時」(徒二〇)の如くにして此地に來臨し給はんとす。主耶蘇を愛せざる者には審
判の禍殃の恐懼目前に迫るあるも、又主の顯現を慕ふ者には

最も快き慰藉なり

是事は教會の地位を了解する者には自ら明瞭なり、教會は來るべき王國と混合すべからず、又舊約の諸聖徒を包含せず、何となれば教會は基督降臨後に建設せられしものなればなり（馬太十六章の十八節を見よ）、教會はペンテコスタの日に始まり（徒二）、擧の時に完了すべし（撒前四）、教會は神が其民イスラエルに向ふ神政の中間にある時限なり、又イスラエルは不信仰の爲め折られたれども、教會は接がれたり（羅十）教會は主の跡を踐み（約十三二十五）、主が卑賤に居給ふ間（徒八〇）、謙遜に行み（腓二〇二一八）、以て主と共に苦み（徒五〇四十一、腓一〇）、偕に擧げられ（羅八〇十七）、最大の福を受くるに足るものとせらるべし、（撒後二）、耶蘇は新郎にして教會は其新婦なり。

モーセ時代の最後の代表者たりし、洗禮のヨハネ曰く「我はキリストに非ず新婦をもてる者は新郎なり、新郎の友起ちて其聲を聞かば之に縁りて喜び多し我今此喜に満つることを得たり」（約三〇廿）と。此にて舊約の諸聖徒とキリストの新婦たる教會とは明

に區別せられたり。

彼等は成全にせらるべけれ共、神は「彼等も我儕と偕ならざれば成全すること能はらん爲に、更に愈れる者を我儕に備へ給へり」（來十一）、教會はキリストの體（哥前十二七）なり、而して教會とキリストとの貴き結合は以弗所書に於て明に説示せられたり、此書に於ては教會は靈に於ては生かされ（弗二）、又神の前に聖く疵なからしめん爲め、世の基を置かざりし先よりキリストの中に簡」ばれたりしを以て（弗一）、甦されし主と偕に（弗二〇）、天の處に坐せしめられたるもの（弗二〇六）とせられたり、又教會は「神が買ひ受けしものを救はん爲め約束の聖靈を以て印せられ」（弗一十四）、愛するもの（父の愛するキリスト）に在る者の受けし恩の榮を讀む」（弗一〇）へきものなり。吁我儕は智慧と默示の靈を受け、神を知り、又召を蒙りて有つ所の望と聖徒に賜はる所の業の榮の富を知り得たらんには（七十八）、我儕は「異邦人の行ふが如く」行はず「愛を以て眞理を語り」、「其體を育て」愛によりて」徳を建てん爲め共に働さ、我儕

の生ける主なるキリストに效ひ以て「我儕皆同じく神の子を信じ之を知り聖人を成すべし」二人のもの一體となり」(太十九〇四)「真理の義と聖にて造れる新人」(弗四〇)となるべし。蛇の頭を砕く女の眞裔なり(創三〇十五)。

されば教會は「神の聖靈を愛へしむべからず」之は救を得る日の爲めに印せられたるものなり(弗四〇)「互に仁愛と憐恤あるべし」(弗四〇)「愛をもて行ひ」(弗五〇)「光の子の如くし」(弗五〇)「智者の如くし機を窺ふべし」(弗五〇)「靈を以て満たされ」(弗五〇)「潔められ聖とせらるゝ迄保養撫育すべし」(弗五〇)「教會は主の前に建てられて點汚なく敏なく凡て此の如き類なく聖にして疵なき榮なる教會」(弗五〇)「キリストの新婦となれり」(弗五〇)「我儕は彼が身の枝なり彼れの肉より出で彼の骨より出でたり」(弗五〇)「嗚呼耶蘇其新婦を自己に納げんとて來臨すべしとの思想より、猶貴き者また外に世にあらんや。こは實に仁慈と愛に満てり、彼其新婦を自己に受くるに何事か爲さる事あらんや、其會合の喜は筆舌の能く寫し能ふ處にあらす。神の己を愛する者の爲めに備

へ給ひしものは目未だ見ず耳未だ聞かず人の心未だ念はざるものなり」(哥前二)「實に我儕は神の靈の感動に依りて「熱心」なるを得「初穂」即ち將に來らんとする喜の先見を有する者なり。然も教會は擧げの時に至りて完全の安息と、完全の交通と主と相抱く擧げを實驗し、而して主の愛の美味に満足すべし。若し誤りて教會と天國とを適當に區別せずんば、此真理の慰藉を全く失ふべし。教會は支配せらるゝものにあらず、キリストと偕に支配すべきものなり(提後二)。

心の苦痛と悲哀は更に無るべし、

耶蘇來らん時。

唯平和と喜悅と満足あるのみ、

耶蘇來らん時。

我途の惨々かりしを主は主は知り給ふべし、

耶蘇來らん時。

我が足の疲れ果てしを主は主は知り給ふべし、

耶蘇來らん時。

何が我を苦しめしかを主は主は知り給ふべし、

耶蘇來らん時。

オー主の腕は我を息はしむべし、

耶蘇來らん時。

夫れ主の再臨は至要の問題にして、聖書全体と尤も近密なる關係を有し。搜整の得て窮むること能はざる程の眞理の鑛山なり。故にこれに就きて論せんと欲すること多く

ありと雖も、此小冊子の紙數已に預想外に出でたれば今暫く其時限を論じ以て筆を擱かんとす。

時期

時期を論ずるに先ち擧と顯現の時期とを明と分別するを要す。

擧の時期に關する重なる思想は、今にても起らんとすと云ふにあり、其確たる徵候時日に至ては聖書中未だ之を示さず、故に我儕は日夜儆醒以て其至るを待つに如かず。夫れ將に來らんとする患難を避けんが爲め、教會の上に擧げらるる前に、其徵候を見るあらんとは或は眞ならん(路廿一〇廿九、に於て主無)然れ共是等の徵候は特に戦争、地震、諸國民の苦難、波濤等を指せるものにして、毎世紀教會悉く目撃し得るものなり。左れば徵候既に初まれりと云ふて可なり。

斯の如く擧の時日に關しては、只顯現に先んずと云ふの外他に確たる事なし、これを略言すればキリストは先づ其教會の爲め來り給ひ、次で患難起り、而して竟にキリ

スト自ら教會と共に下り給ふ時至らん(撒前四〇十六、十七、猶十四)。

顯現の時日に至ては己に預言者に因て預定せられたり(利廿六〇、但)然りと雖も其表號的の語、及不完全の歴學によりて其時を解するは困難にして不確實なり、而して吾人今茲にこれを考究するの餘裕なし、故に願はくは唯熱心と祈禱とを以てこれを探究し、預言にて定めたる時日の最後に近きつゝあるを知らんことを。

顯現に先だち起る事二あり、其一はイスラエルの回復(少なくも其一部)(結三十二、三十三、三十九)、其二は偽基督の勃興(撒後二)是なり。然れ共吾人撒後二章の七節を考ふるに、偽基督の現はるゝは擧の前にあらずして必ず其後なるを知る、イスラエルの回復も亦擧の後なるべし、如何となれば「エルサレムは異邦人の時満つる迄は、異邦人に蹂躪せらるべし」とあり、又神異邦人中より己が名を崇むる民を取り給ひし時は、ダビデの幕屋を復た造り給はざること明なればなり(徒十五〇十四、十六)。

是等の事實に係る徴候を考へ、其來る近にあるを證するは、神の喜び給ふことにして、吾人之に因て其時の近きにあるを知る事を得るなり。然れ共先にも云ひし如く是等の事實は毎世紀反復教會の目撃せる者にして、何れの時又如何にして擧の時期至るべきか、未だ其確たる徴候を知る能はず、其事の隱蔽して知る能はざるは自ら常に教會に儆醒と、戒儆とを興ふるものなること明なり、豈謹まざるべけんや。

祭司の長が至聖所に入りて其職を行ふ時は彼先づ入り、犠牲を供へ來りて彼等に恵を傳ふる迄、衆の人々は皆外に待つと(利十六〇、民六〇、廿)、斯の如く我儕の祭司の長なる基督も、一たび吾人の爲め眞の聖所に入り、教會は彼が復た罪を負ふことなく、己れに望むものに救を施さん爲に顯現し給ふ迄、熱心以て彼を慕ふ可し(一廿八)故に教會に望む事は僕の主を迎ふる時の如く腰に帶し、燈火を點して以て主の至るを待たんことなり。

然して我等最も幸福に思ひ感謝に堪わざることば、我儕信仰の初より日々我等の救の近きにあるを確信すること是なり(羅十三〇十一)

我聞く猶太人再びエルサレムに歸りつゝありと、十八世紀の始に於て、土耳其政府は三百の猶太人を限り聖都に居住せしめたり、其後四十年にして新令を布き、都市の一方を限り彼等に移住を許せりと雖も、其限界甚だ狭少なりき。一千八百六十七年に此規制變じ、猶太人移住の自由を興へしより十年にして、該人民の往古の都に歸り來るもの漸く繁く、古屋は悉く猶太人に買取られ廢屋も變じて彼等の住家となり、其他市中の各所に數多の家屋を新築し、以て彼等の住家に充てたり、又學校、病院、宗教會館の設盛に興り、人口頗る繁殖し八十年前に猶太人の數僅に三百を過ぎざりしが、千八百七十五年にエルサレムのみに於て一萬三千百餘の多きに至れり、且移住民夙に心を殖産工業の改良に用ひ、其成績見るべきもの多し、就中ヅエニシに在る一富人の數千磅の大金を投じ農學校を設立したるが如きは其尤も著しきものなり。此頃有名なる遊歴者クツク氏の著書中此時期に關して左の文あり、これを抄録して以て讀者諸君の參考に供す。

東行して漸くエルサレムに近く及んで、第一余の注目を惹起したるものは、新築家屋の聳立するものなり、余傍人に問ひしに傍人答へて曰く、是各國より歸り來れる猶太人の住家にせんが爲に排造せしものなりと。又聞く、當時數多の會社ありて其建築方を引請け、落成の後は猶太人の求めに應じ一戸二室の宛を以て貸與し、或は賣却するものあり、貧人には年月を限り無償にて貸與し、其力能くこれを買ふに足るものは月賦或は年賦を以てこれを賣却する等、其法英國の貸屋賣屋法に同じし又今日目撃するが如きは哀哭の所と云へるものを見ざりき、余嘗て彼の地滞在中金曜日に市街を徘徊するに、數多の男女古壁の下に群集し或は額を壁上に置き或は手指を壁側に附け、熱心に詩篇を朗讀するを見受けたり。假令彼等の舉動は如何にあつてもせよ、此の都の彼等を集むる驚くべき力ある一端を知るに足れり。噫此等の事を見るも第二の殿宇建立せられず、曩日の儀式再興せられずと宣告せる土耳其人は猶ほハレムの殿及びオハノの墓を修理するに汲々たるか云々。

近來猶太國は英國の配下に歸し、猶太人デイスラエリ氏宰相の職に就きたるは尤も不思議なることにあらずや。これに因て之を考ふるに、吾人は彼等土耳其人の防害を避け殿宇を再建するや疑なきを信するなり。

其他明證猶多し、數多の人東西に奔走して切りに神の預言し給ひし聖語を索むるもの如し、これ但以理書十二章四節にある眞義にして終末の時の徴候なり。又各國の不安且擾亂なるは其時愈々近づきとの語を證するに足れり(來十〇廿五)。

又彼の有名無實の大教會に於て、靈魂上に缺乏あるは是れ時期の近き確證たるなり。終に臨んで一言せん、夫れ我儕主の再臨を遠く未來の事と期するも、又其來るの時日を妄定するも、等しく嫌ふべき事なりと雖も、主の天より降臨の日に於て(撒前四〇十六、十七)、擧げせらるゝ、地に住める聖徒の一群(哥前十五〇五十一)ありて、儼然以て彼を待つものあるは敢へて疑ふべきにあらず、蓋は如何なる殘虐無道の世と雖も其中信仰謹慎なる一群なきに非ざればなり。

基督第一の降臨に先立ち、メニエルに七十週に關する預言を與へ給ひし聖靈は、彼の熱心なるシメオンに「主のキリストを見ざる間は死なじと示し給へり(路二〇)」。然らば彼の老ひたるシメオンに(恐くは又老人アナンにも)(路二〇廿八)此一大事を告げ給ひたる同聖靈は、目醒めて主の來臨を待望し少數の者に、彼等の目は主を見且つ彼等は決して死を感せざるを告げ給はざるが(約十一)〇(約廿六)現今州の東西を問はず神の民の中最も熱心なる信仰を有するものにして、主の再臨近きにあると深く信じて疑はざるもの甚だ多し。

以上論述したるは、我儕共に相勸め其日愈々近るを見て、益々此の如くなすべしとの信徒の戒を樂むの證たるなり(來十〇)若し果して顯現の日近づけりとせば擧げの日は更に近からん。聖書學者及び熱心なる基督信徒は顯現に係る豫言の時期將に終らんとすと言ひ、又一方に於て政治家及び科學者の説は一大事將に起らんとすと云へり、此を考へ彼を察するに心中自ら左の間を發せざるを得ず。

斥候よ夜はなにの時ぞ

始祖アダム、エバ罪を犯せし以來、此世界は暗黒の世(彼後一)即ち道德上の夜(約登二〇三〇)となれりと雖も、基督信徒は信仰と豫言に因て將に來らんとする榮光ある日を(彼後一)望めり。その日來るの時に彼の信仰と希望に因る救は(四)廿五、壯嚴と榮光とを以て顯はるべし(彼前一)嗚呼此日こそ主の民の渴望して止むこと能はざるの日なり。

斥候よ夜はなにの時ぞ

「斥候よ夜はなにの時ぞ、斥候よ夜はなにの時ぞ」
門守答へて曰く「朝きたり夜また來る」と(賽二一)十。基督信者には晝にして不敬虔者には夜なるべし。

基督は明星にして(彼後二〇十九)義の太陽なり(馬四)夫れ早天起き出で謹慎天を望むものみ獨り明星を見ることを得るが如く、獨り眞なる信仰の教會のみ擧げの日に於て、光輝燦然たる明星即ち主キリストを見ることを得るなり。主は義の太陽として先づイスラエルに現はれ、而して顯現の時に於て全世界に現はるべし。

パウロが嘗て「夜既に央て日近けり」と書きたる時は已に十有餘世紀の昔となりぬ

(羅十二) 果して然らば今世紀の今日に於て曉已に過ぎ、將に日の東天に昇るを見んとする時至れりと云ふも敢て過言にあらず。讀者諸君よ「晝に屬ける我等は信と愛の護胸を衣、救の望を胃として慎むべし、そは怒に遭はせんと定めたるに非ず、我儕の主イエス、キリストに由て救を得せしめんと定め給ひたればなり」(撒前五) 然らば我儕

他人の寐るが如く寝ることをせず醒て慎むべし(撒前五) 一友人吾人に贈るに左の文を以てせり「夫れ主の再臨の眞理を信認せんと渴望するもの頗る多し、然れ共皆千辛萬苦の中にあるもの或は神と近く生活するものなり。これに反し飽食暖衣の人々は、此世界の主なる神に謁せんことを考ふること甚だ稀なり。然りと雖も主の來るは眞なりハレルヤ彼來るべし、然り彼來るべし」そは新郎を知れる新婦も亦云ふ主將に來らんとす」と(羅八)十九)も主の

主基督よ願くは來り給へ！來り給へ！！來り給へ!!! 此証はれたる世(一)二十二)も主の

至るを願へり。

主宣へらく「我必ず速かに至らむ。」(黙廿二)

主よ、我爾を待望む、

主よ、爾の美麗を見んがため。

我爾を待望む、

爾の再び來り給ふを。

主よ、爾は其處に往き給へり、

主よ、處を備へんため。

我は爾の第宅に宿らん、

爾の再び來り給ふ時に。

主よ、危険と恐懼の中に、

主よ、我は此處にありて風々渡る。

其時は近し、

爾の再び來り給ふ時は。

主よ、爾の在ざる間

主よ、我は曠きまた迷ふ。

オー其日を早め給へ、

爾の再び來り給ふ時を。

「主人來りて其目を醒し居を見なば此僕は幸なり、誠に我なんぢらに告げん主人みづから腰に帶し僕を食に就せ前て之に供事すべし」(路十二〇卅七)

「我來るまで商賣せよ。」

耶蘇の再臨

明治三十九年十一月十三日印刷
同 年十一月二十日發行

(定價金拾錢)

著者

ブラツクストン

譯者兼
發行者

東京府下淀橋町柏木聖書學院
中 田 重 治

印刷者

東京市京橋區銀座四丁目一番地
ゼー、エル、カウエン

印刷所

東京市京橋區銀座四丁目一番地
教文館印刷所

發行所

東京府下淀橋町大字柏木
聖書學院 内
シ、イ、カウマン

安價にして有益なる雑書

●罪の報
●道の榮(求道者のため)
●眞の安心
●緊急問題

●罪人の隠家
●爆裂彈の宗教

●ありがたい御話
●天国福音唱歌(傳道用)
●音樂福音唱歌(讚美歌)

●世にも珍らしき道
●世にも珍らしき名
●あなたに拜むべき神
●今は恩恵の時、救の日

●希望の言葉●無限生命●天国案内●慰藉の言葉●基督教を信する手續(以上は聖書抜粋せしもの)●信仰の話

●右は美麗なる小冊子にて(十二頁乃至二十頁)傳道用には好適なり、代價一千部金壹圓の割、但シ郵税御自便

●まことの神様よりあなたへの福音
●百物はや備りたれば来るべし
●如何にして新年を迎ふべき乎(年末用)

●貴君は死後の準備が出来て居ますか
●魂に對ふ熱情(信者、傳道者のため)
●基督教に於ける余が實驗(雪山氏)

△天国、地獄
△放蕩息子
△神の律法

以上二枚刷、文章平易、何れも一千枚
金八拾錢(郵税四十錢)

●慰藉の言葉●基督教を信する手續(以上は聖書抜粋せしもの)●信仰の話

●右は美麗なる小冊子にて(十二頁乃至二十頁)傳道用には好適なり、代價一千部金壹圓の割、但シ郵税御自便

ワトソン博士原著
中田重治譯

白
衣

きよめの
みちびき
定價一冊 金八錢
郵税二錢

右御注文の際は東京府下淀橋町當聖書學院シ、イ、カウマン宛にて御申越可被下候

中央福音傳道館諸集會

(京都市神田區淡路町三丁目四番地)

毎晩 午後七時半 傳道說教會

(冬は七時、年中無休)

日曜日 午後二時 聖別會

(この集會には信者諸兄弟を歓迎す)

淺草福音傳道館定集會

毎晩 午後七時半 傳道會

(冬は七時、年中無休)

右凡て來聴隨意

献身 青年男女に告ぐ

聖書學院 は役者養成所

あります。新に生

れし實驗を有し神より傳道者こ

なるべき召を受たる人なれば御

相談の上受入ます。給費生となる

途も開かれてあります。

焰の舌

毎月二回、第一、第三土曜日發行

每號八頁

定價一冊 一錢 郵税五厘

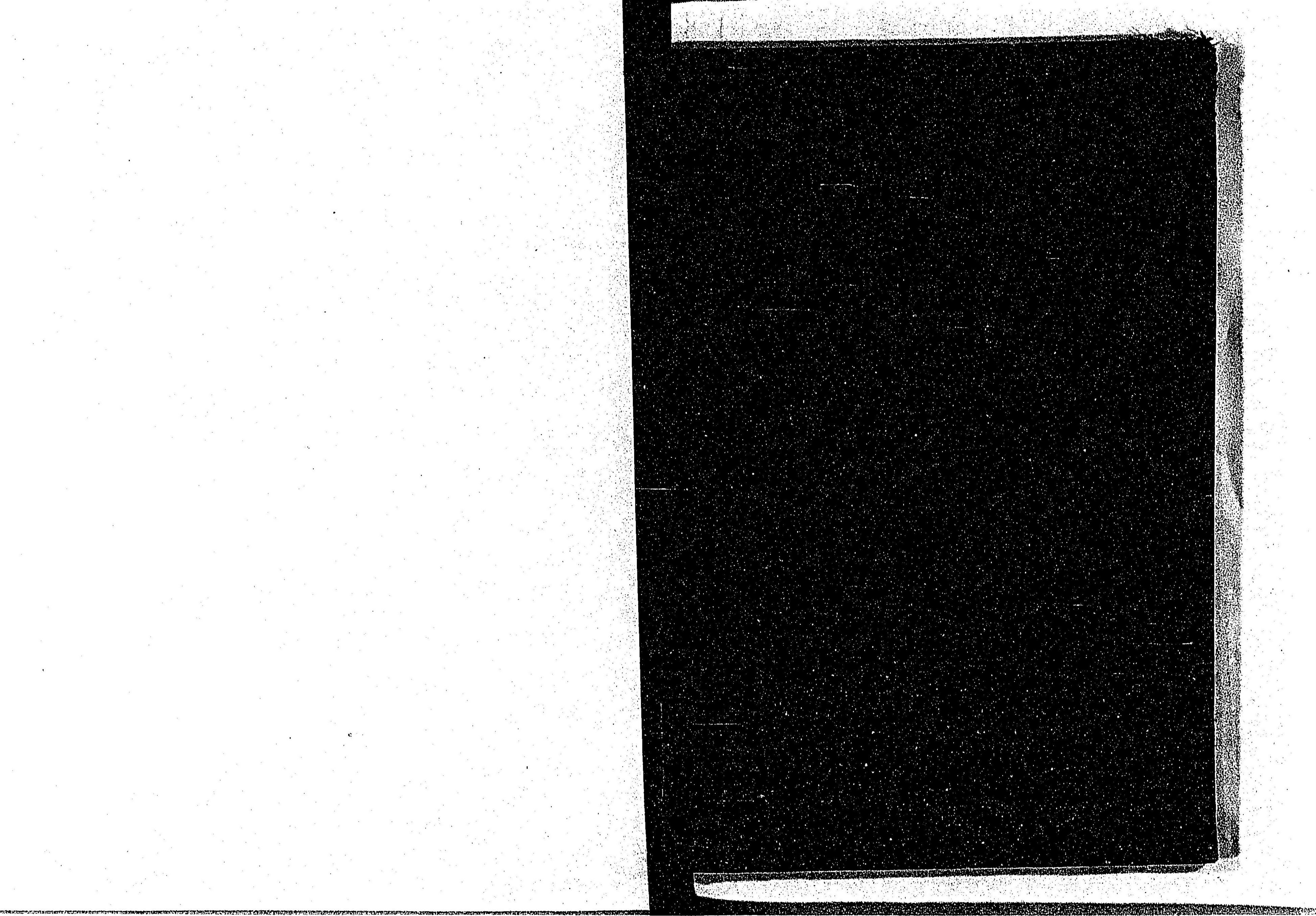
一ヶ年前金三十六錢(郵税共)

焰の舌は日本に於て更生、聖潔、主の再臨
神意を説く惟一の新聞であります。信者を
高尚なる生涯に導びき、全き愛のカナンの
美果を得せしむる好案内者であります。

發行所 聖書學院

326
7





325
7

020228-000-4

325-7

耶穌の再臨

ダブリュー・イ・ブラックストン/著

M39

ABI-0030



